

シンポジウム

神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる

- 趣 旨 最終水期末に展開し、大形石斧と尖頭器で構成される神子柴系石器群について、性格解明のアプローチと新たな研究の方向性を模索する。
- 日 程 2023年1月14日(土) 午前10:00～午後5:00
- 場 所 明治大学 リバティータワー 2階 1021教室
- 内 容
 - 総括報告 10:00～10:30 堤 隆 (明治大学黒耀石研究センター)
科研費「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」実施報告
 - 講演1 10:30～11:30 堤 隆 (明治大学黒耀石研究センター)
黒曜石熱破砕にみる神子柴の行為論
 - 授賞式 11:30～11:45 第3回八ヶ岳あおば旧石器文化賞 受賞者 村瀬早起
11:45～13:00 昼食休憩 -
 - 講演2 13:00～14:20 田村 隆 (元 千葉県立中央博物館 首席研究員)
神子柴 *do ut des*
 - 講演3 14:30～15:50 安齋正人 (元 東北芸術工科大学 教授)
神子柴遺跡をめぐる象徴性
15:50～16:00 休憩
 - パネルディスカッション 16:00～16:40
パネリスト
堤 隆 (明治大学黒耀石研究センター 客員研究員)
田村 隆 (元千葉県立中央博物館 首席研究員)
安齋正人 (元東北芸術工科大学 教授)
- 主 催 「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」代表者 堤 隆
八ヶ岳旧石器研究グループ
- 共 催 明治大学黒耀石研究センター
旧石器基礎研究・次世代育成研究グループ (パレオ・ラブ)



神子柴遺跡出土
黒曜石製尖頭器

本事業は、日本学術振興会 科学研究費基盤 (C) 研究代表者 堤 隆
「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」(17K03216) の一環です。

科研費 研究実施報告

「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」(17K03216)

- 日本学術振興会 科学研究費基盤 (C) 研究代表者 堤 隆
「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」(17K03216)
の実施研究を以下に記載する。

※ 本事業は、当初 2017～2020 の 4 年間の研究事業であったが、新型コロナウイルスの影響により、2 年間の事業延長を行い、終了が本 2022 年度となった。

■ 実施研究集会 (2017～2022 年度)

■ 2017 年度

シンポジウム 神子柴系石器群とは何か？

1 日 時 2018 年 2 月 3 日 (土)・2 月 4 日 (日)

2 場 所 浅間縄文ミュージアムあつもりホール (長野県北佐久郡御代田町)

■ 2 月 3 日 (土) 午前 10 時～午後 12 時 45 分 データベース・ワークショップ 講師：野口淳

■ 2 月 3 日 (土)

◎ 講演会 「神子柴石器群とは何か」 稲田孝司 (岡山大学名誉教授)

- 1 中部高地における後期旧石器時代の展開 長崎治 (川上村教育委員会)
- 2 中部高地の後期旧石器時代遺跡—データベースからみた立地と分布— 野口淳 (東大総合研究博物館)
- 3 男女倉遺跡群の使用痕分析 村田弘之 (長和町黒耀石体験ミュージアム/明大黒耀石研究センター)
- 4 男女倉遺跡群分析の新視点—第 I・III 遺跡の再整理から— 須藤隆司 (明大黒耀石研究センター)

■ 2 月 4 日 (日) 午前 9 時～午後 12 時 30 分 基調報告

- 5 最終氷期末の両面加工刺突具の変遷について 橋詰潤 (明大黒耀石研究センター)
- 6 バイフェイスを携えて 堤 隆 (明大黒耀石研究センター)
- 7 先土器時代終末期における石材利用変化—細石器・神子柴系石器群を中心に— 大竹憲昭 (県立歴史館)
- 8 神子柴型石斧の特質とその意義 橋本勝雄 (千葉県教育振興財団)
- 9 石斧への眼差し 長崎潤一 (早稲田大学文学術院)
- 10 パネルディスカッション 午後 1 時 30 分～3 時

■ 2018 年度

シンポジウム 神子柴系石器群 その存在と影響

1 日 時 2018 年 9 月 29 日 (土)・9 月 30 日 (日)

2 場 所 伊那市創造館 (長野県伊那市荒井 伊那市駅前)

3 内 容

■ 9 月 29 日 (土) シンポジウム基調報告

1 神子柴系石器群の石器石材 中村由克 (明治大学黒耀石研究センター)

2 神子柴集団の石器製作技術 大場正善 (山形県埋蔵文化財センター)

3 神子柴遺跡再考 栗島義明 (明治大学黒耀石研究センター)

4 西日本の非神子柴的世界 池谷信之 (明治大学黒耀石研究センター)

■ 9 月 30 日 (日) 午前 9 時～午後 3 時 基調報告・講演会

5 北海道における神子柴系石器群の存在性 中沢祐一 (北海道大学)

6 神子柴遺跡の基礎的理解 堤 隆 (明治大学黒耀石研究センター・八ヶ岳旧石器研究グループ)

◎ 講 演 11:20～12:20 神子柴遺跡はなぜ残されたか 佐藤宏之 (東京大学大学院)

◎ パネルディスカッション 午後 1 時 30 分～3 時

■ 2019 年度

シンポジウム Hunting: 狩猟相解明のためのアプローチ

期日 2019 年 11 月 16 日 (土) 同 17 日 (日)

場所 浅間縄文ミュージアム あつもりホール

内容

■ 11 月 16 日 (土)

■ 記念講演 「ブッシュマンの狩猟採集生活」 田中二郎 (京大名誉教授)

■ 研究発表

1 「横須賀市 船久保遺跡-旧石器時代最古段階の石器群と AT 以前の陥し穴列-」 麻生順司 (玉川文化財研究所)

2 「日本列島における投槍器・弓矢鏃の出現と波及」 佐野勝宏 (東北大学)

3 「狩猟具の製作技術に迫るために」 高倉純 (北海道大学)

4 「動物遺体から探る先史時代の狩猟活動」 佐藤孝雄 (慶應義塾大学)

■ 11 月 17 日 (日)

5 「実験で考える先史狩猟具」 山田昌久 (首都大学東京)

6 「弓矢の矢柄について」 近藤 敏 (関東第四紀研究会)

7 「人骨の同位体分析からみた肉類と植物の評価」 米田穰 (東京大学)

8 「マタギの狩猟具と狩猟システム」 田口洋美 (東北芸術工科大学)

9 「日本列島先史時代の陥し穴」 佐藤宏之 (東京大学)

■ パネルディスカッション

■ 2020年度 2021年度 新型コロナウイルス禍で、研究集会は中止

■ 2022年度

シンポジウム「検証：サビエンス日本列島への道」

■日程 2022年10月22日(土)・10月23日(日)

■場 所

10月22日(土)：いなっせ 10月23日(日)：伊那市創造館

■内 容

10月22日(土) 中央高地信州におけるサビエンスの足跡をたどる：最新の旧石器調査研究から

- 1 飯田市竹佐中原遺跡の性格と編年的位置付け 大竹憲昭 (長野県埋蔵文化財センター)
- 2 佐久市香坂山遺跡の発掘調査の成果と課題 国武貞克 (奈良文化財研究所)
- 3 サビエンス到来初源期の石斧を考える：野尻湖遺跡群の刃磨製石斧 岩瀬 彬 (東京都立大学)
- 4 神子柴石器群の出自にかかわる諸問題：ロシア極東地域アムール川下流域の調査成果との比較から
橋詰 潤 (新潟県立歴史博物館)
- 5 環状ブロック群の構造と性格：信濃町日向林B遺跡および墨古沢南遺跡の検討から
村井大海(長野県埋蔵文化財センター)
- 6 神子柴遺跡における破砕黒曜石の来歴 堤隆(明治大学黒曜石研究センター)・中沢祐一(北海道大学)
- 7 有樋尖頭器の形態と機能：茅野市夕立遺跡の事例を中心に 両角太一(長野県埋蔵文化財センター)

■10月23日(日) シンポジウム：「検証：サビエンス日本列島への道」(伊那市創造館)

- 講演1 検証：北海道ルート 「北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題」
堤 隆(明治大学黒曜石研究センター)
- 講演2 検証：対馬ルート 「香坂山遺跡と最古の石刃石器群の来歴」国武貞克(奈良文化財研究所)
- 特別講演 検証：沖縄ルート 「3万年前の航海実験と古人骨の人類学的研究から」
海部陽介(東京大学総合研究博物館)

14：45～15：30 パネル ディスカッション 「サビエンス日本列島へ！」

パネリスト 海部陽介・国武貞克・大竹憲昭・岩瀬彬・橋詰潤 ファシリテーター 堤 隆

■ シンポジウム 神子柴系石器群の生成とその性格をめぐって (本シンポジウム)

■ 日 程 2023年1月14日(土)

■ 場 所 明治大学リパティタワー

■ 内 容 本シンポジウム 詳細は1頁に記載

■ 論文および報告等

- 堤隆 2018「ある両面調整体をめぐるエピソード」『資源環境と人類』8号明治大学黒曜石研究センター）
pp.1-16
- 堤隆 2018「信州黒曜石原産地の資源開発と供給をめぐって」『島根県古代文化研究論集』19、pp.1-16 島根県古代文化研究センター、
- 堤隆 2018「神子柴遺跡とその石器群」『神子柴系石器群：その存在と影響』pp.45 - 50
- 堤隆・舟木太郎・池山史華・相川環・大野李奈・片岡生悟 2019「神津島における黒曜石原産地と菊若遺跡の石器」『資源環境と人類』pp.33 - 40
- 御堂島正・堤隆 2019「石器痕跡分析の有効性 -ブランドテストによる検証」『旧石器研究』15pp.69 - 90
- 堤隆・池谷信之 2019「矢出川遺跡の細石刃石器群」『旧石器研究』15 155 - 161
- 堤隆 2020「千早原遺跡の有茎尖頭器」『資源環境と人類』10 pp.55 - 57
- 堤隆 2020「神子柴遺跡と石小屋洞穴」『季刊考古学別冊』32 pp.55 - 59
- 堤隆 2020「神子柴論争」『旧石器研究への視座』創刊号 pp.18 - 29
- 堤隆 2020「神子柴ディスコード」『季刊考古学』153 pp.14 - 16
- 堤隆 2020「痕跡研究と機能論的アプローチ」『季刊考古学』153 pp.47 - 51
- C. A. Гладышев; A. B. Табарев Т. Цуцуми 2021 Мир изначального дзёмона, Японский архипелаг: прир ода, технологии, общество, континентальные соседи *ЗВЕРИ И ЛЮДИ НА ФОНЕ ДРУГ ДРУГА* 1 pp.337 - 357
- Yuichi Nakazaw, Masaki Naganum, Takashi Tsutsumi 2021 The emergence and transmission of early pottery in the Late-Glacial Japan *Quaternary International* 3 pp.1 - 12
- 堤隆 2021「信濃川流域の細石刃集団の行動領域と生業のコントラスト」『千曲川—信濃川流域の先史文化』pp.161 - 174
- 堤隆 2021「佐久の旧石器時代」『佐久の考古遺産』p 7
- 堤隆 2021「八風山遺跡群：最古の石槍アトリエ」『佐久の考古遺産』p 9
- 堤隆 2021「矢出川遺跡：日本で初めて発見された細石刃石器群」『佐久の考古遺産』p 11
- 堤隆 2021「中ヶ原遺跡群：北方系細石刃石器群と希有な遺跡間接合」『佐久の考古遺産』p 12
- 堤隆 2021「麦草峠黒曜石原産地：国内を代表する黒曜石原産地」『佐久の考古遺産』p 13
- 堤隆・中沢祐一 2022「神子柴遺跡における破砕黒曜石の来歴」『シンポジウム 検証：サビエンス日本列島への道』pp.47 - 54
- 堤隆 2022「検証：北海道ルート 北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題」『シンポジウム 検証：サビエンス日本列島への道』pp.58 - 61
- 堤隆 2023「神子柴とは何であったか：黒曜石破壊の行為論」『春成秀爾先生喜寿記念論集』（投稿中）

■ 出版書籍

- 堤隆編 2018 『シンボジウム 神子柴系石器群とは何か』 56P
堤隆編 2018 『シンボジウム 神子柴系石器群とその影響』 50P
堤隆編 2019 『シンボジウム Hunting：狩猟相解明のためのアプローチ』 42P
堤隆編 2020 『季刊考古学 特集：神子柴系石器群とは何か』 153
堤隆編 2022 『シンボジウム”検証：サビエンス日本列島への道”』 66P

■ 学会発表

- 2018 「バイフェイスを携えて」（シンボジウム 神子柴系石器群とは何か）
2018 「長野県佐久市志賀川上流域に分布する「駒込頁岩」とその利用状況について」（シンボジウム 神子柴系石器群とは何か）
2018 野辺山高原における後期旧石器時代の緑色チャート利用（日本旧石器学会）
2018 「神子柴遺跡とその石器群」（シンボジウム 神子柴系石器群とその影響）
2020 湧別技法の在地的変容（明治大学黒曜石研究センターシンボジウム）
2021 佐久の旧石器時代（佐久考古学会講演会）
2022 神子柴遺跡における破砕黒曜石の来歴（シンボジウム”検証：サビエンス日本列島への道”）
2022 検証：北海道ルート 北方系細石刃石器群の流入と神子柴系石器群生成の問題（シンボジウム”検証：サビエンス日本列島への道”）
2023 黒曜石熱破砕にみる神子柴の行為論（シンボジウム 神子柴系石器群の生成とその性格をめぐって）【本シンボジウム】

■ 講演

- 2018 最古の航海者と神津島産黒曜石資源の利用 神津島村教育委員会（招待講演）
2018 神子柴遺跡をめぐる4つの謎 尖石縄文考古館（招待講演）
2018 黒曜石が語る列島の細石器文化 長野県立歴史館（招待講演）
2019 相模野台地の細石刃石器群 相模原市博物館（招待講演）
2019 日本列島を最初に訪れた人々：旧石器研究の課題と展望 明治大学横断研究会（招待講演）
2020 東日本の神子柴系石器群 愛知県考古学フォーラム（招待講演）
2021 土器の登場と縄文時代のはじまり 新潟県十日町市博物館（招待講演）
2022 浅間山麓を駆け抜けた縄文人 小諸市立図書館（招待講演）

黒曜石熱破碎にみる神子柴の行為論

堤 隆

1 はじめに

シンフォニックともいえるのが神子柴遺跡全体の石器群像ではあるが、石器それぞれの個性も確かに際立っている。大形の局部磨製石斧である神子柴型石斧、下呂石や玉髓そして黒曜石の尖頭器、黄玉の搔器、胡瓜形の砥石などである。しかし、この議論で取り上げるのは、そういったいわば神子柴の華ではなく、バラバラになった黒曜石で、その破碎行為の持つ意味である。

2 スポット f

神子柴遺跡においては、局部磨製石斧や尖頭器、搔器・削器・石刃などの優品が円環状に検出されたことはよく知られるが、その影に隠れるように不可解な石器の集中が認められたことはあまり話題に上っていない。スポット f とした(堤 2008)その石器集中は以下の特徴をみせる。

- a: 石器集中からは、1958 年発掘調査当時で 21 個の黒曜石片が検出された(半世紀以上を経た現存資料は 17 個、いずれも国重要文化財)。
- b: 石器集中は 60×50 cm の狭い範囲に取まり(図 1)、この集中に隣接して、炭化物集中が確認されたと記録される(ただし炭化物は現存しない)。
- c: 黒曜石片は接合関係をもち、欠落部もあるが、ひとつの原石に還元された。原石は扁平な円礫で、12.9(最大長)×7.7(最大幅)×15.6(最大厚)センチ、重さは 1397.5 グラムである。
- d: 蛍光 X 線分析の結果、産地は和田鷹山群であった。

この石器の破碎に関する由来については、発掘者の林茂樹により「剥片は打撃による剥取ではなく、熱により破碎したものであることが、破碎面から証明される」とし(林 1983)、熱破碎の可能性が示された。しかし、その後の研究報告において堤は、表面には被熱特有のクモの巣状のひび割れが観察されなかったことから「被熱の可能性は低いものと考えられる」とし、「原石の上端部を大きく加撃(矢印)した際に、内部に多数ある球顆類に衝撃が伝わり、アクシデンタルにバラバラに砕けたもの」と認識した(堤 2008)。

3 黒曜石の熱破碎

2008 年、半世紀の時をへて発掘研究報告が上梓された神子柴だが(林編 2008)、その後 15 年を経過した今日であっても黒曜石の破碎に関しては不可解な部分が拭い去れなかった。そこで堤は、黒曜石の水和層や被熱研究に取り組んでいる北海道大学の中沢祐一とともにその破碎現象について検討を進めて、熱破碎であることを再認識した。その検討については 2022 年に概括的

に報告したところである(堤・中沢 2022)。中沢との共同研究にあっては、神子柴の黒曜石に観察される現象レベルの科学的記載とその成因について別稿を用意しているため、ここではその点に関しては必要最小限にのみ触れることにし、結論的にはその破碎をめぐる意図についての解釈を、あくまで堤の個人的な視点から提示してみることにする。

まず、この黒曜石の剥離面を改めて観察すると、リングが剥片の縁辺でなく、剥離面中央部への扶雑物などに取束することが極めて特徴的で(図2)、縁辺に打圧点がないことは明白である。次に、曖昧な表現だが剥離面が微妙にヌメツとした光沢(ヌメリ光沢)をもつ状況が認識できる。一方で、その表面には、クレージング(crazing)と呼ばれる黒曜石の特徴的な被熱痕跡「ヒビ割れ」は確認できなかった。また、破断の縁辺が直線状をなし、破断面が平坦で(平坦破断)、破断角が直角をなす(直角破断)ことも大きな特徴であった。が、こうした平坦破断や直角破断は、堤による火中への黒曜石投下実験においても、被熱によって生じることを確かめている。

4 行為の意味を考える

最大長およそ13センチ、重さ1.4キロを計る大型の黒曜石が、保有者の不注意で火中に紛れ、とういて放置されたとは考えがたい。明らかに火中に投下した意図を汲み取るべきであろう。さらにそこには、20断片以上もの破碎が起きるまでの時間的経過があった。こうした原石の火中への投下、そして破碎といった行為は、単なる廃棄とは捉えられず、重要な意味をもつものと考えられる。安斎正人はこの黒曜石破碎が熱によるものであるなら、バラバラにした象徴的な意味を問わなければならないと指摘した(安斎 2003)。そして黒曜石の存在には、単に道具の素材というだけではなく、田村が述べるように石の中の石 righteous rocks であり(田村 2008)、「ハウ hau」、すなわちマルセル・モースが記載した「霊力の宿るモノ」と見られる特別性がある。

神子柴にみる黒曜石破碎行為、いずれにせよこの振舞いは、石の中の石ともいえ、しかも大きな黒曜石を火中に投げ、惜しげも無く破碎してしまうという象徴的行為である。これが何を意味するのか、本議論で考えてみることにしたい。

引用文献

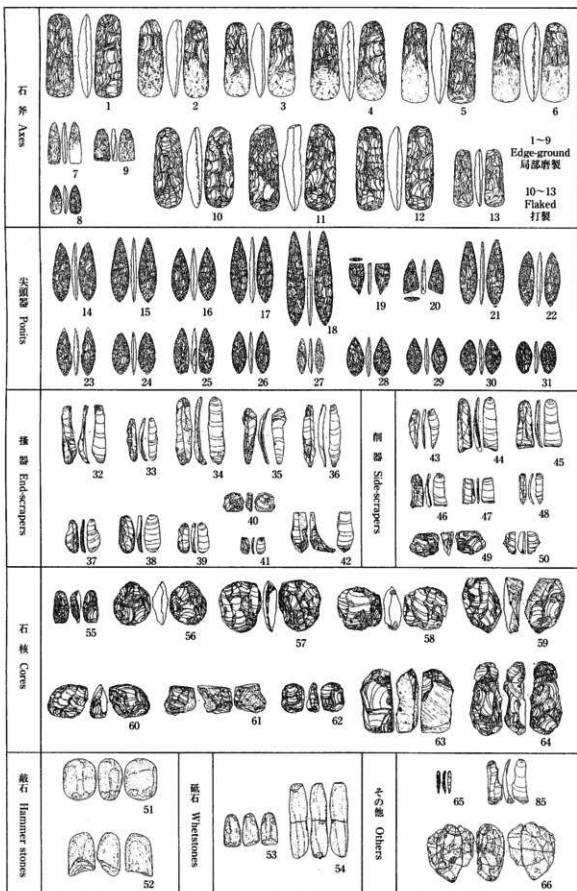
- 安斎正人 2003 「後期旧石器時代から縄文時代へ—神子柴・長者久保石器群の再検討—」『旧石器社会の構造変動』pp.247-305
- 田村 隆 2008 「黒曜石のハウ」『考古学』VI pp.1-44
- 堤 隆 2008 「9 接合資料」『神子柴：後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究』pp.92-93 上伊那考古学会
- 堤 隆・中沢祐一 2022 「神子柴遺跡における破碎黒曜石の来歴」『シンポジウム 検証：サビエンス 日本列島への道』pp.47-54
- 林茂樹 1983 「神子柴遺跡」『長野県史考古資料編：主要遺跡中兩信』長野県史刊行会
- 林茂樹編 2008 『神子柴：後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究』上伊那考古学会 409P



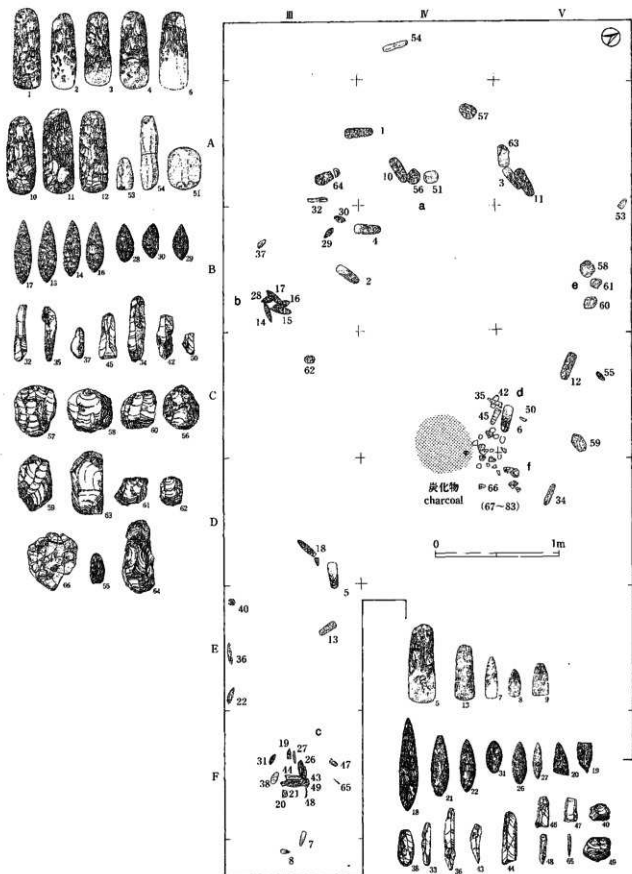
図1 破碎黒曜石の出土状況（囲い内）



図2 破碎黒曜石の接合状況



付図1 種子柴遺跡出土石器 Fig.1 Stone artifacts from Mikoshiba Site (1/10)



付図2 神子柴遺跡の石器分布
 Fig.2 Stone artifacts distribution of Mikoshiba Site

シンボジウム神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる

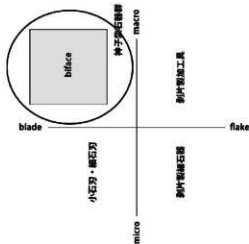
神子柴 *do ut des* (私は汝が与えるために与えるのだ)

田村 隆

- 1 神子柴遺跡の特殊性とその一般的理解
- 2 贈与交換の社会理論
- 3 後期旧石器時代社会の全体的構想
- 4 北太平洋沿岸文化圏論の拡張

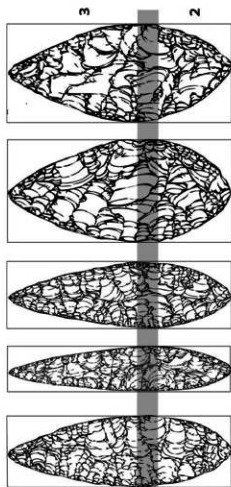
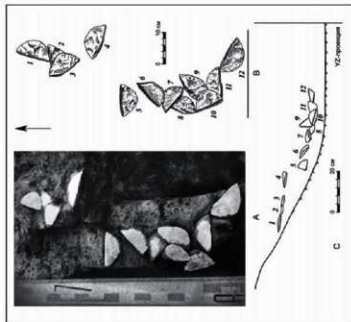
おもな参考文献

- 堤 隆編 2020 『季刊考古学 153 神子柴系石器群とは何か』 雄山閣
- デュルケーム 山崎 亮訳 2014 『宗教生活の基本形態—オーストラリアにおけるトーテム体系』 ちくま学芸文庫
- パーソンズ・スメルサー 富永健一訳 1958 『経済と社会 I』 岩波現代叢書
- ポランニー 玉野井芳郎・平野健一郎編訳 1975 「アリストテレスによる経済の発見」『経済の文明史』 日本経済新聞社 187～234 頁
- モース 有地 亨・山口俊夫訳 1976 「贈与論」『社会学と人類学 I』 219～400 頁 弘文堂
- 渡辺 仁 1988 「北太平洋沿岸文化圏—狩猟採集民からの視点」『国立民族学博物館研究報告』 13-2 297～356 頁
- Block, M. 1977 The past and the present in the present, *Man* (N.S.) 12, 278-292.
- Deller, B. D., Ellis, C. J., and J. R. Keron 2009 Understanding cache variability: a deliberately burned early Paleoindian tool assemblage from the Crowfield site, southwestern Ontario, Canada, *American Antiquity* 74-2, 371-397.
- Gamble, C. 1982 Interaction and alliance in palaeolithic society, *Man* (N.S.) 17, 92-107.
- Lee, R. B. 1972 !Kung spatial organization: an ecological and historical perspective, *Human Ecology* 1, 125-147.
- Rust, H. N. 1905 The obsidian blades of Carifornia, *American Anthropologist* (N.S.) 7, 688-695.
- Spielmann, K. A. 2002 Feasting, craft specialization, and the ritual mode of production in small-scale society, *American Anthropologist* 104-1, 195-207.
- Wathall, J. A., Koldehoff, B. 1998 Hunter-gatherer interaction alliance formation: Dalton and the cult of the long blade, *Plains Anthropologist* 43-165, 257-273.
- Wiessner, P. 2002 Hunting, healing, and hxaro exchange, a long term perspective on !Kung (Ju'hoansi) large game hunting, *Evolution and Human Behaviour* 23, 407-436.
- Woodburn, J. 1982 Egalitarian society, *Man* (N.S.) 17, 431-451.



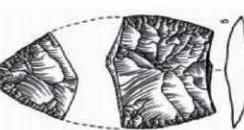
1 神子燧石器群の構造
後期旧石器時代の剥片石器群は、二項性(石刃・剥片)と機能的两極性(細石器；大型石器)という二軸によって構成されるが、両面加工石器は、blade - macro 器に重なる。神子燧石器群はこの領域に収容される。

4a

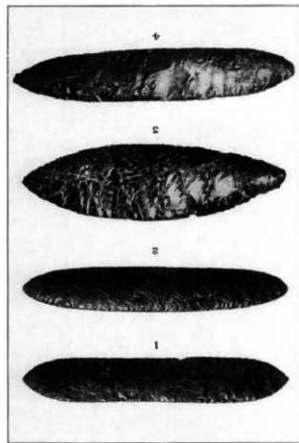


両面体の企面性 (形態にかかわらず最大幅は3；2の分割線と一致する)

3



a ウシユキ I 遺跡 9 号住居跡の両面体キャッシュユ
b 10 号住居跡土壌出土の破された薄型両面体



クローバーが1905年に報告したアメリカ先住民の黒曜石製ブレード

シンボジウム神子柴系石器群の生成とその性格をめぐって

神子柴遺跡の象徴性

安齋正人

- ・1958年、長野県上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡の発掘調査
 1962～64年、青森県上北郡東北町長者久保遺跡の発掘調査
 細石器文化と縄文文化の間に挟まる一文化階梯、大陸渡来の北方系文化
- ・佐藤達夫・角鹿扇三、長者久保遺跡と出土石器の初見
 日本海ルート
- ・「私が想像するに、これは系統の問題であるとともに文化受容に関連しているのではないだろうか。すなわち、この新しい形態の石斧（及び尖頭器）はその魅力と新奇なことが一緒になって、当初<生活財>としてよりも<威信財>・<交換財>として受容され、おそらく動揺する社会の統合のシンボルとしての機能を与えられていたのが、生計維持様式の変化・社会の安定化（縄文文化化）と歩調を合わせるようにして、しかも後続の渡来石器といっしょになって次第に象徴的なものから現実的なものに転化されていき、結果として縄文社会の主要な生産手段になったと考えられる。例えば、北海道の間村遺跡出土及び白滝村ホロカ沢表採の2点の片刃打製石斧ないしは丸ノミ形石斧は黒曜性製であるため、杉浦重信が、「他のタイプの片刃石斧と同列に扱うには疑問があり、石斧とは用途を異にする石器と考えた方が妥当であろう」（富良野市教育委員会 1987:126）と、特別視したものであるが、この2点の石斧の存在などは（威信財）説の傍証になり得る。儀器・祭具として機能したかもしれない。細石刃文化期から神子柴・長者久保文化期にかけては社会的に不安定な時期であった。地域諸集団はその文化的同一意識の再確認と社会的統合のために祭儀活動などの増大・強化に努めていたと推測される。隣接集団は機会を作っては頻繁に集合を繰り返していた。神子柴遺跡の石器出土状態を丹念に分析した田中英司(1982)は、「神子柴遺跡の小範囲から検出された石器群は、どれひとつのみでも遺構として成立するような個性の強い小群を単位としつつ集合していること」(67頁)が大きな特徴であると述べている。散会に際し次回に備えて、各集団を象徴する石器が収蔵あるいは埋納されたのかもしれない。出現期のデボのこのような性格は、縄文草創期に入って次第に経済的なものに変化していったと思われる」（『先史学の方法と理論—渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(4)—』『旧石器考古学』35, 1987）
- ・「伝播論を方法とする人はそろそろ適応拡散プロセスのモデルを提示すべきであるし、東アジアを系統論の視点から解放して比較生態学的視点から捉えるべきであろう。ここでも石器群の即物的な理解から集団・環境の社会生態学的解釈の道を探る時期に来ている」（『史学雑誌』第99編第5号、1990）

- ・1998年7月4・5日、上伊那郷土館における林茂樹を囲んでの神子柴遺跡出土石器群検討会。

林茂樹の当初の所見・森嶋稔の見解・岡本東三の見解・田中英司の見解・栗島義明の見解

私見と提言：「神子柴（系）文化」の問題…私は一般には「神子柴石器群」を使う。

「神子柴型石斧」・「神子柴型尖頭器」の問題…神子柴遺跡から出土した大型の石斧と大形の尖頭器に限定して、技術・形態的に厳密に定義しておくべきである。

個別石器の問題…一群の黒曜石片 人為的加熱処理であれば、黒曜石の石塊をバラバラにした、そうした行為の象徴的意味が問題となろう。

石器群の遺跡内分布（布置）あるいは構造の問題…林6群、田中8群、栗島3群 主体的な意図が反映
「二項対立」的ななんらかの秩序（構造）が隠されている。石器（石材）の色に注目

デポ7の問題…神子柴遺跡はデポ状の石器集石群と生活臭のある石器集積群が組み合わせられており、ヨーロッパ先史学でいうデポとは異質である。

移動形態・居住形態の問題…あえて言えば、Bの矢印の地点に当たり、その場合、長期滞在地というよりも社会集団にとって特別な地という風に解釈している。

立地・景観の問題…神子柴遺跡の立地が伊那谷を見下ろす孤立丘の上の東端が選ばれていることは、景観考古学(landscape archaeology)状の意味があるように思われる。“景観”の概念(Jonston 1998)の有効性と、密接不離のものである。(「狩猟採集民の象徴的空間—神子柴遺跡とその石器群—」『長野県考古学会誌』89、1999)

- ・「1998年の7月に長野県の上伊那郷土館で神子柴遺跡出土の石器の検討会が行われた。その時初めて全出土品を一括して見る事ができた。全点を比較することによって、石器群が含意するシンボリズムに強く印象づけられたのである。そのひとつが石器の色の対照性であった。四点が折り重なって“デポ”（埋納）状態で出土した神子柴型尖頭器と呼ばれる大型品は、玉髄で作られていて白色を呈している。それらとは対照的に、一般の尖頭器は黒曜石で作られているので黒色である。並べてみて白黒の対象に意味があると直感した。この体験の六年後に、再び開催された「神子柴シンポジウム」において発表の機会を得て、この色彩のシンボリズムに初めて言及した。『長野県考古学会誌』の107号に掲載された要旨から、該当部分を抜き出しておく」（『色の考古学』『季刊考古学』第14号、2008）
- ・「森山公一は神子柴型尖頭器を、…三つの類型に分類した。…ここでは典型的な過剰デポ

インの①の5点のみを“神子柴型尖頭器と定義しなおす。つまり、神子柴遺跡出土の石器群は、象徴的な社会的意味が込められた”神子柴型尖頭器“と、その模倣品あるいは実用的な大型・小型の尖頭器で構成されていると見なすのである。神子柴型尖頭器に見られる色のシンボリズムについては前号で言及した。

「私は従来”神子柴文化大陸渡來說“を批判し、列島内発生説を唱えている。要点を言えば、原因は明らかにされていないがおそらく生態環境の変化に伴って、北海道にいた北方系細石刃石器群（植刃型槍）を装備した集団の一部が、1万4000年前ころに主として日本海側を通過して南下してきて、東日本の各地にいた在地集団と接触した。特にその最前線であった中部高地周辺の在地集団は、この異文化集団との緊張関係下で、自己主張・自己顕示（アイデンティティ）のために過剰デザインの石器（神子柴型尖頭器・神子柴型石斧）を創り出した、という仮説である。／私が思うに、神子柴石器群の見方に転換の契機を創り出したのは、『長野県考古学会誌』掲載の「神子柴型尖頭器とその周辺の二、三の課題」でおおむね次のようなことを書いている。「ここで私は、神子柴遺跡、同じく長野県にある唐沢B遺跡出土の石斧を典型例として神子柴型石斧と呼び、整形剝離の簡素化・粗雑化、あるいは形態の小量化によってその過剰デザインの崩れが見られる石斧を神子柴系石斧と呼ぶことにする。また森嶋の六段階変遷は現実には識別不可能なので、代わって三段階位の大きな変遷枠で捉えることにする。…私の用語では、①の一部が神子柴石器群、その他の①と②以降が神子柴系石器群である」（『デザインの考古学』『季刊考古学』第15号、2008）

- ・「その立地（景観）、石器の出土状況、特殊な石器と通常の石器の二項的なあり方などからみて、旧石器時代から縄紋時代への構造変動期という時代の表象を帯びた遺跡である。色彩のシンボリズム（玉髓の白と黒曜石の黒の対照）、過剰デザイン（神子柴型石斧・神子柴型尖頭器）という切り込みで前々回、前回の二度、本誌上ででも私見を述べてきた。その後に発掘調査から50年たって待望の報告書が刊行されたので、“神子柴人”の景観という視点からもう一度言及しておく。…結論的には、一小集団の“習慣的景観というよりは、複数小集団による”社会的景観”を想定すべきである」（『景観の考古学』『季刊東北学』第16号、2008）

追記：縄紋文化の発現—日本旧石器時代構造変動論(3)（『先史考古学論集』第3集、1994）

「神子柴・長者久保文化」の大陸渡來說批判—伝播系統論から形成過程論へ—（『物質文化』72、2002）

「神子柴遺跡に立つ」・「神子柴系石器群」（『日本人とは何か』144-151頁・217-250頁、柏書房、2010）

「定住生活への移行」（『縄紋時代史 上』269-350頁、啓文舎、2017）

第3回 八ヶ岳あおば旧石器文化賞

受賞者のご紹介

受賞者 村瀬早紀（むらせさき）

（南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻
博士前期課程1年）



選考理由

第3回八ヶ岳あおば旧石器文化賞の受賞者は村瀬早紀さんに決定した。

村瀬さんは、岐阜県出身で、1998年生まれの24歳、現在、南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻博士前期課程1年において旧石器考古学を専攻している。

村瀬さんは、岩手県遊井名田遺跡や京都府上野遺跡、岐阜県湯ヶ峰山頂遺跡など幾つかの旧石器遺跡の発掘調査経験をもち、現在は岐阜県下呂市に産出し、日本列島中央部において優良石材として後期旧石器時代初頭から使われ続けた下呂石をテーマに研究を進めている。ことに下呂石の産出地点細分のための厳密な比重測定法を考案、同じ原産地といえども湯ヶ峰山頂とその中腹とでは、石材の比重が異なることを明らかにする。その獲得地点の異なりを遺跡出土の石器の同定に応用しており、今後、詳細な下呂石の開発史解明が期待される。

人類の原材料資源の開発や獲得に関する議論は、石油からレアメタルに至るまできわめて今日的な課題であるとともに、下呂石や黒曜石などの石材資源について旧石器時代に溯ってまで究明すべき根源的な論題で、人類史研究におけるその重要性は計り知れない。

コロナ禍においても志を灯し続け、発掘から分析まで野外科学の姿勢をもって研究に取り組む村瀬さんは、本賞の受賞者にまことにふさわしく、また、将来ある女性の学究として、第3回八ヶ岳あおば旧石器文化賞を贈る次第である。

2022年12月31日

八ヶ岳旧石器研究グループ代表 堤 隆

本賞の授与に関しましては、以下の考古学関連各社より協賛を賜りました。
心より御礼申し上げます。

(株)アルカ様 (株)パレオ・ラボ様 (株)ラング様 (50音順)